

【研究ノート】

朝日遺跡の精神史

Intellectual History of Asahi Site in Aichi Prefecture

犬塚康博

INUDZUKA Yasuhiro

要旨 愛知県清須市の朝日遺跡は、1968年の貝殻山貝塚と検見塚の愛知県史跡指定、1971年の大規模破壊－保存運動－貝殻山貝塚の国史跡指定、以後長期にわたる発掘調査を経て、2012年に出土品の国重要文化財指定を見た。この遺跡をめぐって、人びとは何を欲望したのか。遺跡名の変遷と、それにかかわる言説をとおして、この問題を検討した。特に1971年の大規模破壊と保存運動で、人びとの観念は、「貝塚」から「遺跡」への転換を果たし、「群」ならびにその論理的必然たる「全面」を獲得する。これにしたがい、遺跡の全面保存が叫ばれたが、一部の国史跡指定に結果した。保存運動の終焉によって、「全面」は保存から調査へと、自己実現の場を移してゆく。調査の「全面」は、行政－職業研究者の占有するところとなり、今日を迎えている。これを自賛する政治が、出土品の国重要文化財指定であった。では、「保存」はいかに。本稿は、この課題を爾後へ提出した。

1. はじめに

愛知県清須市朝日にある朝日遺跡は、弥生時代の集落遺跡である――。世人、このようにこの遺跡を書き始めるであろうか。無論、住所変更はある。時代観、遺跡観も変わるだろう。しかし、これが構文である。そして、遺物誌、遺構誌がこれに続き、往時のあれこれが想像されて興を添える。本稿は、構文の外部にある世態、すなわち世人とこの遺跡とのコミュニケーションの如何を問うものである。

2012年9月6日、朝日遺跡出土品2,028点が国の重要文化財に指定された。これより前には、1971年12月15日にこの遺跡の一画の貝殻山貝塚が国指定史跡となり、1968年11月4日には貝殻山貝塚と検見塚が愛知県指定史跡になっている。これら3時期の出来事は、単純なタイムライン上のテキストのように見えるが、どこか変だった。なぜ、県指定の2貝塚のうち貝殻山貝塚だけが国指定史跡となり、検見塚はいまも県指定のままなのか。なぜ、貝殻山貝塚は近所の保育園児たちが賑やかに散歩する公園であって、検見塚がトーロー要塞のその人¹⁾のようなのか。2012年と1971年のあいだの41年とは何か。公式の理由はおおよそ知れるが、それを保留するとき、えも言われぬ違和を直観した。本稿はここから出発している。

以下、遺跡の名称を手がかりにして、朝日遺跡の意味を検討する。

2. 朝日遺跡の名称

現行の「朝日遺跡」にいたる名称の変遷については、次のように整理されている。

朝日遺跡群の名称は昭和40年代前半に一般化していくようであるが、それが定着し始める以前にあっては、朝日貝塚あるいは朝日貝塚群と呼ばれていたこともあった。

(略) 本書においてはこれまでの名称である朝日遺跡群から「群」を消去し、朝日遺跡と呼称することとした²⁾。

「朝日遺跡」という名称は、『朝日遺跡Ⅰ(本文編Ⅰ)』で行政的におこなわれたものである。端的であり、この事実は動かない。同書刊行の1982年9月20日が、その記念日となる。

1) 朝日貝塚、朝日貝塚群

さて、「朝日遺跡群」の名称に先立ち、「朝日貝塚あるいは朝日貝塚群」を見ておこう。1971年に伊藤禎樹は、「弥生前期の包含層がほとんど貝塚をとまなうことから「朝日貝塚群」と呼ばれている」と貝塚の名の由来を書きつけ、「とくによく知られているのは貝殻山貝塚で、この貝塚は水田の中の島畑の上にマウンド状をなし、遠くからでもよく識別できるので、かつては朝日貝塚といえはこの貝殻山貝塚をさしたほどで」「今までの発掘も殆んどがこの貝殻山貝塚もしくはその周辺に集中している³⁾」と、朝日貝塚と朝日貝塚群、貝殻山貝塚の関係を簡潔に示した。

往古より、悪戯、商売、学術など、その目的の如何にかかわらず、地上に可視なる墳墓に人が群がるように、貝殻山貝塚にも世人来りて掘り返したのである⁴⁾。学術名目の営みは、「遺物の研究自体が(それも殆んど土器論である)研究の最終目的であるかのような錯覚におちいつていた⁵⁾」と言う。ここで伊藤が素描しているのは、朝日貝塚、朝日貝塚群の社会史であった。

そして1968年11月4日、人と遺跡のコミュニケーションを行政的に総括、統制するがごとく、検見塚と貝殻山貝塚が、「朝日貝塚」の名で愛知県史跡に指定される⁶⁾。一方、「朝日貝塚群」の名も、1970年3月刊行の『朝日貝塚予備調査報告』に見えていた。しかし、厳密に言うと執筆担当者によって名称が異なり、調査主任吉田富夫と調査員榊原克己が「朝日貝塚群⁷⁾」を、調査員紅村弘が「朝日遺跡群⁸⁾」を使用している。教育長仲谷義明の「序」に見える「朝日貝塚群⁹⁾」は、吉田の代筆によるものであろうか。指定名称の「朝日貝塚」は、書名だけという異なるようすを呈していた。その「朝日貝塚」を純粹に使用したのが、1972年3月刊行の『貝殻山貝塚調査報告¹⁰⁾』であった。

第一に明らかなのは、「朝日貝塚あるいは朝日貝塚群と呼ばれていたこともあった」という評論的事態にとどまらず、そう嘯いた行政が、「朝日貝塚あるいは朝日貝塚群と呼」んでいた事実である。第二に、『朝日貝塚予備調査報告』に見た多様は、行政の外部が行政の内部に及んだ結果と見られ、「朝日貝塚あるいは朝日貝塚群」の行政内外を通じた流通が確認できる。

2) 朝日遺跡群

では、「昭和40年代前半に一般化していくようである」とされた「朝日遺跡群」の名称を見てみよう。「昭和40年代前半」の語は、1970年頃の意であろうか。時期の指示といい、「ようである」といい、あいまいな雰囲気醸している。「朝日遺跡群」という名称は、

そのようなものだったのか。

私たちは、次の文章にであう。

私達はこれら先学諸氏により今まで局地ごとに独立した名称をつけられてきた方法を排し、総括した「朝日遺跡群」という名称でこれらを統一し、（略）呼称していく事にした¹¹⁾。

ここには、先の「朝日遺跡」命名宣言と同じ明示性がある。しかし、先の整理はこれを採用せず、「昭和40年代中半に一般化していくようである」とした。朝日遺跡群保存会のこの宣言は、宣言たり得ていなかったのか。「朝日遺跡群」の名称のプライオリティが、保存会にはなかったのだろうか。

確かに、前記のごとく、1970年に紅村弘が「朝日遺跡群」の名称を使用していた。しかし、それを含めて、保存会より前に「朝日遺跡群」の名がおこなわれていたとしても、この宣言を事実として踏まえ、これに依拠することは不当でない。それは、「朝日遺跡」の名が1970年に登場していても¹²⁾、1982年の宣言をその開始とみなすように、である。

本稿は、「朝日遺跡群」の名称の開始点を保存会設立時に求め、その発生史に引き続き注意しながら、稿を進める。

3. 「朝日遺跡群」の検討

1) 前史

「朝日遺跡群」の名称は、遺跡の大規模破壊を契機に獲得された。それは、突然変異ではなく、それまでに蓄積された形質のあらわれと考える。これが、歴史的なものの見方である。

朝日遺跡群保存運動を中心的に担った朝日遺跡群保存会は、設立当初より「朝日遺跡群」の名称を使用していた。そのため、その名の使用開始は、保存会設立の1971年2月6日となる。その端緒となった破壊行為の現認は「1971年1月早々¹³⁾」であるから、約1ヶ月のあいだに「朝日遺跡群」の名称が生成されたことになる。

ところで、これより前、1969年11月9日に開催された名古屋考古学会定期大会で、「朝日貝塚群遺跡について」と題する研究発表がおこなわれていた¹⁴⁾。発表者の水谷和喜は、「朝日貝塚群遺跡」の名称を1971年まで使用している¹⁵⁾。水谷は、保存会の設立メンバーでもあるため、「朝日貝塚群遺跡」と「朝日遺跡群」は、その人において時間的先後関係はあっても、同義だったものと思われる。あるいは、「朝日貝塚群遺跡」から「朝日遺跡群」への発生があったのかもしれない。紅村弘の「朝日遺跡群」もあわせると、1969・1970年頃は、「朝日貝塚」「朝日貝塚群」以外に、多様な名称が生まれつつあったと言うべきであろう。それは、この遺跡が多様な相貌を呈するようになった、つまり人びとがこの場所を、そのように見ることができるようになったことを意味した。

たとえば、複数の名称から「朝日遺跡群」へ変化した際にはっきりしているのは、「貝塚」が脱落あるいは後景化する事実である。まず、貝塚があった。明治の大森貝塚にはじまり、以降の人種論・民族論に寄り添う人類学・考古学的関心から来した「貝塚の時代」が盛行

する。名古屋でも、「熱田の貝塚、呼続の貝塚と並び称された高蔵貝塚と桜田貝塚¹⁶⁾」が愛でられた。人びとは、貝塚に人骨を求め、土器を求めたのである。ことほどさように、貝塚は人骨や土器の容器であった。先述の「それも殆んど土器論である」とは、この光景の活写にほかならない。

「朝日遺跡群」への改名は、この遺跡の精神史における、貝塚の時代からの脱却、明治からの切断という歴史的転回点であった。かくして、朝日貝塚、朝日貝塚群の名が、貝塚の時代の残照であったことも、事後的にわかるのである。

そして「朝日遺跡群」の名は、1971年の現実を投影する明白な政治であった。保存運動は、朝日遺跡群の全面保存を要求した。「群」に対応するのは原理的に「全面」であり、その保存は全面保存でなければならないからである。しかし、事態の進捗につれて愛知県教育委員会は、貝殻山貝塚周辺の調査と、検見塚の部分保存しかなし得ないさまをあらわにしてゆく。そうした行政に、先験的に対抗する概念でもあった。

顧みると、土地改良事業による遺跡破壊が、線的、面的に広範囲に及んだことによって、「群」の観念がより強烈になったのではないかと、筆者には思える。それまでは、もっぱら地表面で認められてきた遺物散布地の、地下の包含層と遺物が天地返しされたかのごとく地上に躍り出たのである。その事実が、人びとの観念をして、貝塚から遺跡へと、実存的に移行せしめたと思えてならない。

もちろん、学理的動機から来す「群」「全面」のあることは承知している。津山市沼遺跡に関して近藤義郎は、「集落を調査して全掘を考えてみないほうが可笑しいのではないのでしょうか¹⁷⁾」と言い、伊藤禎樹も「共同体のことを考えるために、集落遺跡の全面発掘は夢であった¹⁸⁾」と、名古屋市見晴台遺跡の発掘調査について書いていた。期せずして同調した考古学研究者二人の発言に見られる本質への論理的到達を、一気に強いるような暴力性が、1971年の遺跡破壊にあったのではないかと思うのである。あの光景は、紛れもなく暴力であった。

2) 後史

「朝日遺跡群」——。それは新しい地平であった。しかし現実には、旧態依然としていた。

こうした状況の下に、一九七一年の朝日遺跡群の破壊に対して、立ち上がったのは三渡俊一郎を代表とする「朝日遺跡群保存会」であった。「東海の文化財を守る会」もこれに協力して、県議会への請願運動を展開したが、史跡公園化と、一部の保存をかちとったのみで終わった¹⁹⁾。

そして、「昭和50年度完成予定の別の朝日遺跡群破壊工事である環状2号線²⁰⁾」と、朝日遺跡群保存会が明記していたにもかかわらず、これに対する保存運動はおこなわれなかった。さらに、「朝日貝塚群の破壊は、直接には土地の区画整理であるが、この原因となった土地改良をもたらしたのは、第二環状道路計画、国鉄瀬戸線計画による都市化の波であった²¹⁾」という、伊藤禎樹の正しい分析がありながら、1971年の破壊の根拠、遺跡の未来にまで保存運動は及ばなかったのである。それは、「路線計画の中止、又は変更等と呼ばける積極的な保存姿勢ではなく、あくまで道路はそのまま通し、その際の工事破壊にあたっ

ては記録保存という極めてナンセンスな破壊擁護の姿勢を既に表明してしまっている²²⁾」愛知県教育委員会に対して、保存運動が「落胆²³⁾」してしまったからだと言う。

「群」－「全面」の原理主義にとって、決断における絶対主義の「全てか無か」は似つかわしい。「落胆」は「無」の選択と言える。「全て」が不可能ならば、残されているのは「無」しかない。リアリズム、相対主義はあり得なかったのかと問えば、現前する貝殻山貝塚の国史跡指定が、事実上のリアリズム、相対主義だが、「無」の前では文字通り無きに等しい。保存運動は無くなったのである。

しかし、新しい地平の「朝日遺跡群」は終焉することなく、自己実現の場を移してゆく。驚天動地の遺跡破壊から誕生した「朝日遺跡群」の名称は、保存会限り、保存運動限りとはならなかった。1982年9月20日に「朝日遺跡」が宣言されるまでの約10年間、行政が「朝日遺跡群」の名称を使用してゆく。それは、1971年の土地改良事業はすでに終わり、環状2号線にともなう愛知県教育委員会の発掘調査が継続した10年であった。この事態に、「朝日遺跡群」の名称の合理性が証明されているが、次のように理解できるだろう。

「全面保存」の語は、「全面」と「保存」のふたつの契機から成り立っていた。このうち、「全面」が「群」に対応する。「朝日遺跡群」の名称それ自体に「保存」の直接的契機はなく、「全面」だけから成り立つ構造であった。保存会が宣言した名称ではあったが、この構造であれば愛知県教育委員会が使用することに支障はない。「朝日遺跡群」の「全面」の欲望は、発掘調査を拡張してゆくことに矛盾なく対応してもいた。

再度、保存運動に言い及べば、それは無くなることによって、自己の原理であった「群」－「全面」と、「無」の選択ののちに遺した「全て」において、後史を生きたとと言えるのである。

なお、後史と言うよりほぼ同時期に、例外がひとつある。保存運動が終焉した直後に刊行された『貝殻山貝塚調査報告』は、先述のように「朝日遺跡群」を使用しなかった。同書は、貝殻山貝塚周辺の発掘調査報告だったが、広域を指す場合も「朝日貝塚」を使用している。指定名称に忠実な態度であったり、第2次調査の国庫補助金交付に由来したふるまいの可能性も想像できるが、自らに対抗した保存運動へのナイーブな政治だったのかも知れない。いずれにしても、瞬時、前時代への退行が、そこにあった。

4. 「朝日遺跡」の検討

1) 文化的連続

1982年9月20日、「朝日遺跡群」の名称は「朝日遺跡」に変えられる。その理由は、次のとおりであった。

（略）昭和47年度から8ヶ年間にわたって実施してきた名古屋環状2号線（一般国道302号線）建設予定地内の発掘調査および昭和53年度に本委員会が実施した範囲確認緊急調査の結果により、当遺跡は上記数ヶ所の貝塚のみならず、多数の住居跡や方形周溝墓、溝等を包括する一連の遺跡であることが明らかとなった。これら各種の遺構はいわば有機的・時代的に結びつきながら一つの集落を構成していると判断されるのである²⁴⁾。

発掘調査の結果、「一連の遺跡」「一つの集落」の認識がもたらされ、「朝日遺跡」にいたったことがわかる。しかしこの認識は、名称を変えるほどに画期的だったのであろうか。これ以前の1962年に、吉田富夫は次のような遺跡観を披露していた。

何れにしろ貝殻山・検見塚に前期以後の遺跡があり、松ノ木・竹村など周辺の地に中期以後の、また白弓に末期以後の遺物が存することは、前期以来、既存集落の人口と耕地との拡大に伴ない分村してつぎつぎに新しい集落を形成して行く過程を示すものとして興味深いであろうし、また将来遺跡探索の上に一つの示唆を与えるものであろう²⁵⁾。

このとき、遺構は不明ながら、貝塚以外の遺跡は認識されており、「一連の遺跡」の質は獲得されている。そして吉田は、各遺跡の遺物の時期差に、集落の時間的変遷を見て取り、「分村」を想定した。この「分村」という歴史的、社会的範疇への想像力は、あきらかに「有機的・時代的に結びつき」の水準に到達していたと言える。「一つの集落」には到っていないとも、大規模破壊＝大規模発掘調査など知るよしもないころの、優れて考古学的抽象であった。

その約10年後、遺跡そのものは、次のように理解される。

現在までに確認された朝日遺跡群の範囲は南北 600m、東西 500m にわたるもので、これらの内には学史的によく名を知られた貝殻山貝塚、二反地貝塚等が含まれ、それら以外にもなお名称もつけられていない多くの貝塚や文化層が点々として連続して分布しており、それらの多くが現在まで未調査のまま保存されてきた²⁶⁾。

1982年に示された「東西約1,000m、南北約700mの範囲²⁷⁾」に比べると、1971年の東西規模は小さい。それは、名岐バイパス東側の遺跡範囲を確認する2回目の予備調査以前だったためであろうが、これを考慮すれば、発掘調査以前に得られる水準としては妥当であり、調査後の所見とも大きく矛盾していない。「多くの貝塚や文化層が点々として連続して分布して」いるというくだりにも、吉田の遺跡観の継続を読み取ってよい。伊藤禎樹も、「この朝日貝塚群は（略）、まだこれからの発見が予想される多くの遺跡からな²⁸⁾」と書いていた。破壊事件に直面して、矢継ぎ早に「朝日遺跡群」の名が得られたのもそれゆえのことだったと思われる。

このように、1962年の吉田の「朝日貝塚群」は、20年後1982年の「朝日遺跡」の質によく接近していたと、筆者は考える。吉田の約10年後1971年の「朝日遺跡群」も、逆行する条件が認められないかぎり、然りである。しかも、「朝日遺跡群」の名称を用いてはいないが、1971年に伊藤は、「朝日貝塚群がトータルなものの一環として存在していること」、つまり「縄文時代以来の尾張平野の歴史の進行の過程で把握する²⁹⁾」ことを提起していた。これはあきらかに、「朝日貝塚群」の名の時代のクライマックスである。1982年を俟つまでもなく、貝塚群か、遺跡群か、遺跡か、という名称問題は、このときすでに超えられていたのであった。

理論だけでなく、実践における連続も見えてとれる。

私達はこの行政的無法、無策といえる時期に何の記録もないまま遺物が散逸していく事にいたたまれず、1月中旬より内山邦夫氏と飯尾が中心となり現場にて遺物採集を行う事に専念した³⁰⁾。

そして、報告書『朝日遺跡群の土器』を刊行する。保存会のこうした考古学的実践のうちに、愛知県教育委員会の調査と「朝日遺跡」が胚胎していたと見るのは不当であろうか。もちろん、両者の間には、手弁当と有給との物質的な違いがある。なににも増して、「いたたまれず」という精神的抑圧は計り知れないものがあり、それとは無縁な愛知県教育委員会の調査を同一視できないことは、よく承知しているつもりである³¹⁾。しかし、「全面」－「群」のもとで両者は、通底してしまうのも否めない。「遺物採集」と「発掘調査」は、人と破壊される遺跡とのコミュニケーションの変奏ではないのか。言い方を変えれば、遺跡にとって「遺物採集」と「発掘調査」の意味は、「破壊」に〈還元〉できるのではないか。そのような理解が得られるのである。

2) 政治的断絶

こうした連続性とはうらはらに、名指すことの政治による断絶が、「朝日遺跡」の改名にはあった。「敵／味方」を指示するほどにあからさまではないものの、朝日遺跡とそれ以外とを切断する政治である。

改称に際し、先行する「朝日遺跡群」の名称について、次のように説明していた。

この名称は従来よりこの地域に所在した貝殻山貝塚・二反地貝塚・検見塚・竹村貝塚・寅ヶ島貝塚などの貝塚、およびその周辺にひろがる遺物包含地域を個別的にとらえ、なおかつそれらを総称する意味において使用されてきたものである³²⁾。

「朝日遺跡群」が「使用されてきた」という表現には時間の観念があるが、上に見てきたような「朝日遺跡群」自身の時間、すなわちその生成過程が失われていることに気づく。ここには、「朝日遺跡群」の発生史がないのである。自分たち行政が使用する以前の「朝日遺跡群」を静的に固定、あるいはせいぜい前記のようにあいまいにして、そこからの「朝日遺跡」の断絶がおこなわれている。「朝日遺跡群」が動いていては、「朝日遺跡群」と「朝日遺跡」との連続が見えてしまうからであろう。「静／動」のトリックがここにある。

少なくとも、「個別的にとらえ」られはじめ、次第に「それらを総称する意味において使用されてきた」と、言うべきところであった。それが高度に成長したのが1971年であり、それ以前の吉田富夫に胚胎していたことは先に見たとおりである。

以上は、「朝日遺跡」を導くための歴史と経験の断絶だが、このとき、朝日遺跡群保存会も保存運動も疾うにない。亡霊から断絶したのであろうか。そうではなさそうである。

「使用されてきた」には、愛知県教育委員会自身の使用が含まれていた。そのことは否定されない。しかし、「朝日遺跡」の開始によって、「朝日遺跡群」を使用してきた自己からの切断はおこなわれた。かくして「朝日遺跡」の名指しの政治は、外部に対するだけでなく、内部にも向けられていたことがわかる。

愛知県では、1981年度に愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財発掘調査部がはじまり、

1985年度には財団法人愛知県埋蔵文化財センターが設けられて、埋蔵文化財処理体制の整備が進行していた。「朝日遺跡」の記念日1982年9月20日は、そうした新しい体制が開始されて間もない時期にあたる。このことを考慮するとき、内部に向けた集団形成の政治でもあったように思えるのである。1980年代以降、愛知県の埋蔵文化財行政から考古学のポストモダンがはじまるのも、これと無縁ではないだろう。

「朝日遺跡」は、「朝日遺跡群」との、一方で考古学的、文化的な連続、他方で政治的な断絶の地平であった。

5. おわりに

愛知県教育委員会は、朝日遺跡群保存会の欲望を欲望して自己実現し、保存会もまた愛知県教育委員会の欲望を欲望して自己実現した。主観的な本意／不本意とはかかわりなく、現前した貝殻山貝塚の国史跡指定が、双方の仰ぎ見る、あるいは双方を睥睨するメタレベル、到達点となり、欲望しあう関係は終焉する。保存会は保存運動を終了し、それ以前の平時日常の考古学に戻る。愛知県教育委員会も日常のノルマ、ルーチンワーク、発掘調査を遂行してゆく。両者は、動物化するものであった³³⁾。

ここでようやく、冒頭で触れた違和の所以にたどりついたようだ。「朝日遺跡」は、「朝日遺跡群」を「個別」の「総称」と規定し、これと差別化する上で自らを「一連の遺跡」「一つの集落」と定義して「群」を削除した。しかし、それはあくまで象徴行為であって、実際は「個別」の「総称」たる「朝日遺跡群」が継続、越境しゆく。

たとえば、国指定史跡貝殻山貝塚、県指定史跡検見塚は、いまなお「個別」に地上に存在したままである。検見塚は、アトム化すらしている。そして、この遺跡が、現実のインターチェンジ形遺跡、空想の環濠集落に〈還元〉されるとき、「一連の遺跡」「一つの集落」の当為があきらかになるとともに、存在の分節、分断がより一層あらわになる。

遺物もまた然り。重要文化財の「愛知県朝日遺跡出土品」とは、個人や組織によって検出され保管される万余の出土品を除外した、保管施設が愛知県埋蔵文化財調査センター、所有者が愛知県という特殊な一部分であった。「一連」「一つ」とは、学理的な遺跡や遺構、遺物のことでなく、朝日遺跡の社会史のごく一部分、すなわち発掘の原因たる国－環状2号線と、発掘の結果たる愛知県教育委員会－愛知県埋蔵文化財調査センターの意であったことに気づく。畢竟「朝日遺跡」とは、1982年も2012年も、おそらくそのあいだの30年間も、内部に向けた政治、楽屋ネタだったのである。

保存会以来の「群」－「全面」の欲望は、愛知県教育委員会で内部化し、欲求化、動物化、オタク化により、この遺跡をやがてインターチェンジ形遺跡でなくするだろう。そのとき環濠集落は、空想から脱しているだろうか。情報こそが権力でもあった。これにしたがい彼らは、永続的かつ自動的に掘り続けて、情報を新作し、流通させ続ける。「全面保存」ならぬ「全面発掘」である。「全てか無か」において、保存運動が「無」を選択したあとに残されていた「全て」が、ここに流入している。

歴史的、社会的には、1972年に私たちが見透したように、テクノクラット養成機関化するアカデミー＝「職人の考古学」と、解体されテクノクラシーに集約されゆく在野研究団体＝「趣味の考古学」という二項への分解と、ふたつながらの国家への統合を特徴とする

国家独占資本主義段階の考古学³⁴⁾、その正しい展開であった。

無論、これにて問題が解決したわけではない。1971年に提起された「朝日遺跡群」－「全面保存」は、上記のように「全面発掘」に向けた官製、準官製の封建的な運動にすり替わり、原理としての「保存」は、部分保存や記録保存に相対化、現実化、矮小化されて、宙づりになったままである。1971年の分裂や対立は止揚されず、問題の先送りがおこなわれただけであった。原理としての「保存」は、いまもどこかで、きっと生き続けているだろう。1972年に私たちが提起した、「大衆の考古学」もまた然り。それらは、いかにして可能か。これが、ポスト朝日遺跡の課題である。

注

- 1) 2013年4月29日、筆者は検見塚をたずねた。目的的にここをおとずれるのは、44年ぶりだったと思う。往時のように、名岐バイパスを運転走行中の自動車からは見えず、ジャンクションの主要な道から逸れてはじめてあらわれるその姿は、名伏しがたいものであった。しかし検見塚は、Googleマップを用いると見えているのである。宇宙には開かれているそのありようから、オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』（岩波文庫34-225-1）、浜本正文訳、岩波書店、2012年、を想起するのに困難はなかった。翌々日に詞曲「監禁」が出来上がり、同年6月2日に初演した。<http://www.orenest.net/images/uploads/songnest/confinement.jpg>
- 2) 愛知県教育委員会編『朝日遺跡1（本文編1）』、第一法規出版株式会社、1982年、1頁。
- 3) 伊藤禎樹「朝日貝塚群保存の問題点」考古学研究会編集部編『考古学研究』第18巻第1号、考古学研究会、1971年、68頁。
- 4) 吉田富夫も、「貝殻山・検見塚などは、貝塚上に築かれた小丘で、あるいは古墳ではないかともいわれるが、とにかくさように見渡す限りの水田中に目立つところへ、そこから貝殻が出るので、古来人の注意するところとなっていた」と書いている。吉田富夫「朝日貝塚群」愛知県文化財保存振興会編『愛知の史跡と文化財』、名古屋泰文堂、1962年、43頁。
- 5) 伊藤禎樹「朝日貝塚群保存の問題点」、71頁。
- 6) 仲谷義明「序」『貝殻山貝塚調査報告』、（奥付なし、愛知県教育委員会、1972年）、（序の頁）、（看板）「愛知県文化財指定史跡／朝日貝塚／検見塚」、清洲町、1968年（<http://archaeologyscape.kustos.ac/wp-content/uploads/2013/06/kemidzuka01.jpg> による）、参照。
- 7) 愛知県教育委員会編『朝日貝塚予備調査報告』、愛知県教育委員会、1970年、1・11頁。榊原克己は、自ら指導して刊行した、『寅ヶ島第二貝塚』、愛知県立愛知工業高等学校郷土研究クラブ、1968年、のほか、筆者は実見していないが、同書の文献にあがっている1950年代の自身の論文にも、「朝日貝塚」の名称を使用していた。
- 8) 愛知県教育委員会編『朝日貝塚予備調査報告』、12－13頁。
- 9) 仲谷義明「序」、同書、（序の頁）。
- 10) 『貝殻山貝塚調査報告』、参照。
- 11) 飯尾恭之『朝日遺跡群の土器』、朝日遺跡群保存会、1971年、7頁。
- 12) 吉田富夫「清洲町朝日遺跡の調査」『名古屋考古学会会報』第14号、名古屋考古学会、1970年、4頁、参照。
- 13) 飯尾恭之、前掲書、1頁。
- 14) 「おしらせ」『名古屋考古学会会報』第14号、10頁、参照。
- 15) 水谷和喜「朝日貝塚群遺跡について(1)」『名古屋考古学会会報』第14号、3－5頁、同「朝日貝塚群遺跡について(2)」『名古屋考古学会会報』第19号、名古屋考古学会、1971年、8－10頁、参照。
- 16) 犬塚康博「考古学の風景」名古屋市博物館編『考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ』、名古屋市博物館、1988年、77頁。
- 17) 近藤義郎『発掘五〇年』、河出書房新社、2006年、108頁。
- 18) 伊藤禎樹「あとがきにかえて——わたしの考古学——」『伊勢湾地域古代世界の形成』、株式会社アットワークス、2014年、372頁。
- 19) 渡辺英樹「愛知県下の考古学研究者——戦後の潮流——」『プロレタリア考古』第15号、「プロレタリア考古」編集局、1974年、3面。
- 20) 飯尾恭之、前掲書、3頁。
- 21) 伊藤禎樹「朝日貝塚群保存の問題点」、69頁。

- 22) 飯尾恭之、前掲書、3頁。
- 23) 同書、3頁。
- 24) 愛知県教育委員会編『朝日遺跡Ⅰ(本文編Ⅰ)』、1頁。
- 25) 吉田富夫「朝日貝塚群」、43頁。
- 26) 飯尾恭之、前掲書、7頁。
- 27) 愛知県教育委員会編『朝日遺跡Ⅰ(本文編Ⅰ)』、1頁。
- 28) 伊藤禎樹「朝日貝塚群保存の問題点」、68頁。
- 29) 同論文、71頁。
- 30) 飯尾恭之、前掲書、1頁。
- 31) いまも私たちは、名古屋市の天白・元屋敷遺跡や湿ヶ遺跡の破壊事件に呻吟している。犬塚康博「経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第28号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2014年、232-234頁、参照。
- 32) 愛知県教育委員会編『朝日遺跡Ⅰ(本文編Ⅰ)』、1頁。
- 33) 東海の文化財を守る会の伊藤禎樹は、以後も、朝日遺跡群保存運動の意味を、自身の研究過程で問い続けた。伊藤禎樹「あとがきにかえて——わたしの考古学——」、374頁、参照。
- 34) 斎藤宏「見晴台発掘と僕達の考古学——「職人の考古学」↔「趣味の考古学」を止揚し、「大衆の考古学」を創造しよう!——」伊藤禎樹・犬塚康博・岡本俊朗・小原博樹・斎藤宏・桜井隆司・村越博茂・安田利之『見晴台と名考会に関する問題提起——その2』、1972年、4-13頁、参照。

〔付記〕本稿は、故岡本俊朗氏が構想しながら未発に終わった論文「遺跡保存運動の論理」に触発されている。この論文の構成は、「Ⅰ. 環2と土地改良事業と朝日遺跡群／Ⅱ. 71年度中の朝日遺跡群の保存運動(朝日遺跡群保存会、東海の文化財を守る会)／Ⅲ. かつての保存運動と論理——新しい萌芽、賀茂の場合／Ⅳ. 保存運動の論理と〈学〉の社会への権力志向(社会的存在価値の確立)」(fische「考古学の風景」朝日遺跡群破壊43年を記念する」、2014年1月11日、<http://archaeologyscape.kustos.ac/%E6%9C%9D%E6%97%A5%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BE%A4%E7%A0%B4%E5%A3%8A43%E5%B9%B4%E3%82%92%E8%A8%98%E5%BF%B5%E3%81%99%E3%82%8B/>(2014年1月11日))であったことがわかっている。岡本氏の目的はいまとなっては霧中だが、その理由にあった1971年の朝日遺跡群破壊と保存運動は、いまなお文化財保護の「難題」としてある。そしてこれはまた、1969年春、貝殻山貝塚で偶然にお会いして以来指導いただいている飯尾恭之氏に、1971年当時恵与された『朝日遺跡群の土器』が体現していた当の問題である。両氏の課題意識からはかけ離れてしまった感否めないが、40数年来の学恩に応えるべくこの小論を草した。なお、文献入手に際して、福井淳一氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。